



大原 洋子

設計演習 I

第 1 課題
東京公園計画

第 2 課題
団地再生計画

3 年 1 組

担当：
曾我部 昌史

【第 1 課題】

大原 洋子

公園をどこにつくれば、人々の憩いの場に成り得るのか。私は計画するにあたり、特に敷地選別に重点を置いた。

神田川は線路沿い、街中を流れているにもかかわらず、人々の意識は薄く、有効利用されていないように思える。

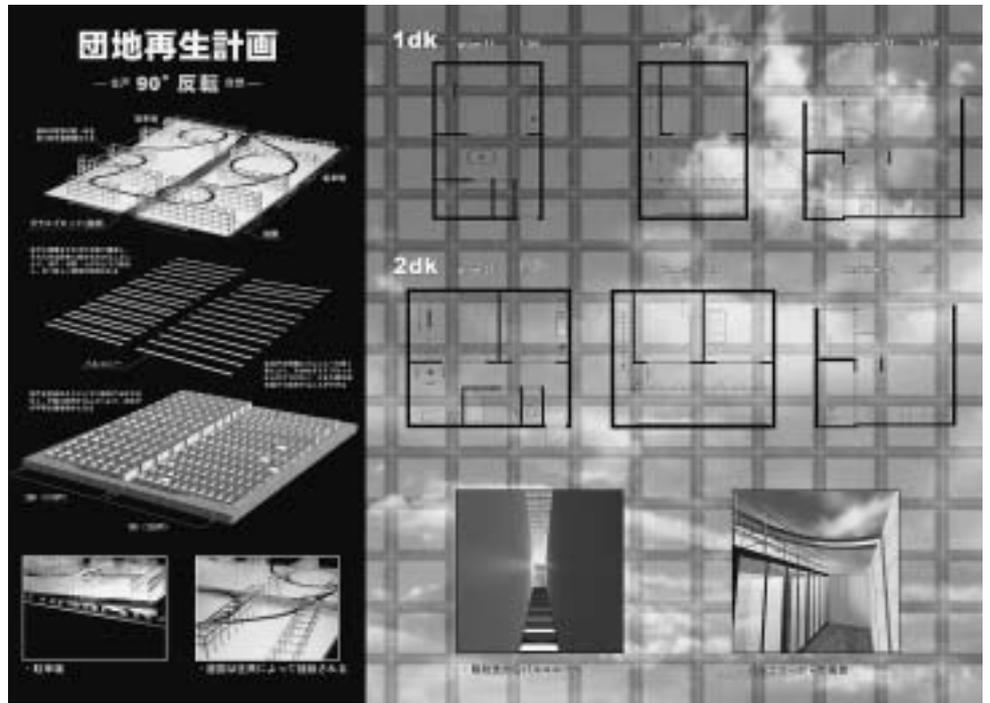
そこで、神田川および周辺に少し手を加えることによって、街や川が生まれ変わるような憩いの場を計画した。

指導＝曾我部 昌史

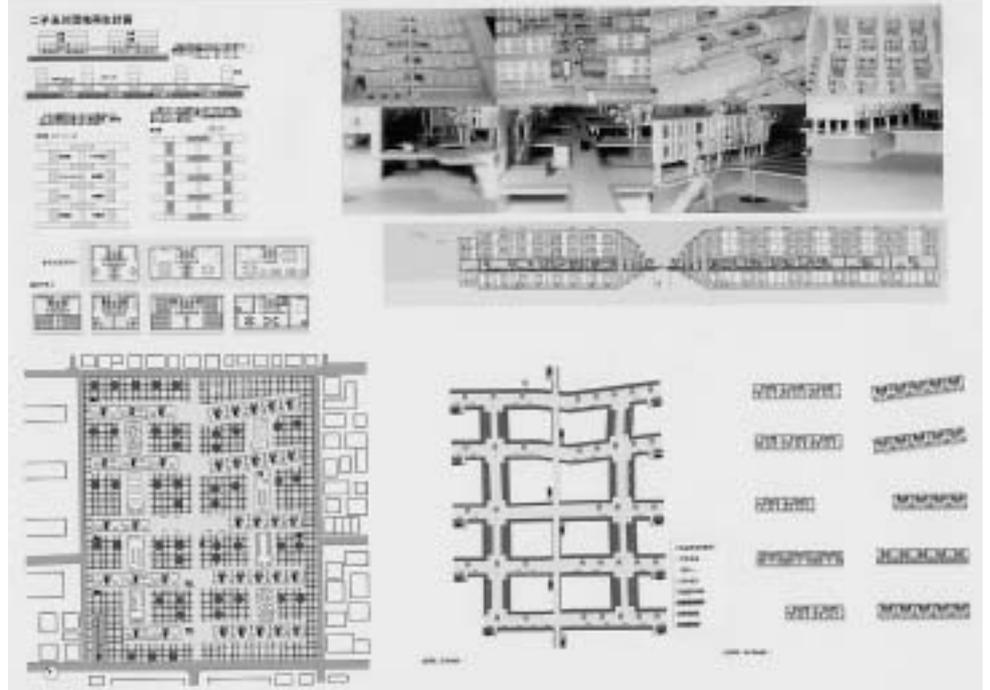
東京のどこかに公園と読み替えることが可能な隙間を見つけ、

公園として完成させることがこの課題の目標である。「公園」そのものの定義が曖昧であるため、案を考える拠り所が極めて少ない。そのためアイデアを詰める段階では、どの案も相当難航していたが、最終的に示された案は、どれも当初予想していなかったようなものばかりであった。ここで紹介できないのが残念だが、この大原案の他に、都市を時間で使い分けるような案から、既存の公園をほとんどそのまま使いながら全く違った物にしてしまうような案まで多岐にわたる。大原案の特徴はエリアの広大さと、アイデアの気楽さにある。「どこかに敷地を見つけて案を詰めるなんて、そんな差別主義的なことはでき

ないわ」とばかり（本人がそんなことをいっていたわけではないが）、あらゆるところにチョコチョコと手を加え、とどまるどころを知らない。どこまで続くのか不安にもなるが、その一方で、もっとやってくれと言いたくなるような衝動にも駆られる。不思議な魅力をもった案である。この作品集では判りにくいかも知れないが、ドローイングは写真にトレペを重ねてスケッチを加えるという方法でつくられている。この案の実現には本人の絵心によるところも少なくないが、それ以上に、独特の世界を見つめる目、いってみれば生活の美学のようなものがなければ、こんな案は浮かんでこないだろう。



大井 裕介



田中 信也

**【第2課題】
大井 裕介**

昭和30年代に建てられた団地のほとんどが、機能的に配置された幾つかのboxの中に、より多くの住戸数を入れることがまず第一に考えられていた。団地再生計画として、住戸数を減らさずに、人と住戸と自然を融合させる全く新しい団地の形式を考え出した。

田中 信也

現状は、4層のよくある公団住宅で、それを少ない操作で、より楽しい空間に置き換えることを考えました。GLにSOHOを持ち込み、3、4層をSOHOで働く人の住居

と想定します。GLは地域の人々にも開かれていてほしいと考えたので、カフェやショールーム（SOHOの作品を展示）を配置しました。SOHOと住居部分が入り乱れた感じにはしたくなかったので、2層をヴォイドとし、各棟をブリッジで結び、植栽を施し、住民のためのパブリックゾーンとしました。

指導＝曾我部 昌史

老朽化した団地の有効利用の仕方を発明することが、この課題の目標である。敷地としては、昭和30年代につくられた典型的な公団の団地として、公団二子玉川団地を選んだ。RC造4階建ての建物が適度な隣棟間隔

を保ちながら並び、その間を40年近い時間をかけて育った木々が埋めることで生まれる雰囲気は、決して悪くない。初めは、何も手を加える必要はないのではないかというムードが強かったが、最終的には、この環境の良さをどう生かせるかという方向へと向かった。ここでも一部の作品しか紹介できないのが残念だが、これらの他に全体を公園化するもの、建物を部分的に撤去しながら新しい動線を導入するものなど、さまざまな切り口によるバリエーションに富んだ提案が行われた。ここで紹介するのは、その中でも最もコンセプトualな案と、最もリアリティのある案の二つである。大井案は、現状の団地の良さを

記憶として残しながら、新しい住居部分は全く別に設けるというものだ。団地だった部分には最低限のストラクチャのみが残され、公園化される。また、緑豊かだった外構部分は、半分埋まりながらべったり住居に埋め尽くされる。ちょうど住居部分と外構部分がそれぞれ入れ替わることで、団地の存在の仕方が浮上するというわけだ。田中案は大量の現実的な工夫によって支えられたものだ。敷地周辺の環境を分析し、階ごとの機能の割付、外構部分の調整、駐車場の設置、住居部分のバリエーションの追加など、さまざまな操作が加えられる。プレゼンテーションを含め完成度の高い案である。